

夏の思い出

夏まつりと言えば汗だくにお神輿担ぎ、盆踊り、そして花火、提灯・ガス灯の夜店を思い浮かべる。その夏まつりも最近では神輿の担ぎ手がいらない、大人も子供も遊びや楽しみが多様化してあまり関心を示さないようになってきた。祭りに参加の子供も今では少なくなるばかり。

平成と呼ばれる年号に変わるところまではこの横山でもお神輿が6～10台ほど見られたように記憶している。

7月に入ると各地区のお神輿が榎神社に勢ぞろいし、寒川神社の宮司による御霊入れの祭事が行われる。

さあいよいよ榎神社から照手公園の広場まで「わっしょい、わっしょい」と掛け声と鳴り物入りで神輿が練り歩く、にぎやかなものであった。それも目的地の照手公園になるべく時間をかけてわっしょい、わっしょい。あまりすすいと進んでは長老にしかられて押し戻される。

各自治会は、この後それぞれの自治会の拠点公園に戻り英気を養い、午後の自治会区域の神輿に備える。みんな若かったんですね。

今年の神輿はどうだったのだろうか？夏の風物詩、夏の思い出をなくしてはいけません。

この古き良き時代の思い出は残していきましょう。

(館報編集委員 M)



十三夜



空気が澄み渡る秋は、お月様がとりわけ美しく輝く季節。新月の日から15日目に満月になる「十五夜」が中秋の名月として広く知られていますが、「十三夜」はご存じでしょうか？

同様に新月から数えて13日目で、満月には少し欠ける月です。古くには縄文時代から月を愛でる風習があったようなのですが、現代のお月見の元となる「十五夜」に月を鑑賞する文化は、平安時代に中国から伝わった中秋節が起源とされ、「月の宴」として貴族の間に広まったようです。管弦や詩歌を楽しみ水面や盃に映った月を眺める風流なものでした。

それに対して「十三夜」という日本発祥のお月見があります。

宇多天皇(867～931年)が「無双」と称して十三夜の月を愛でたのが始まりとも、醍醐天皇(885～930年)が清涼殿で「月の宴」を催したのが始まりとも言われています。

十五夜と対をなすのが十三夜。この二つを合わせて「二夜の月」と言います。どちらか一方しか見ないことを「片見月」といい両方見ないと縁起が良くないと言われていたようです。

江戸時代になると庶民の間にまで広まるようになりましたが、平安貴族たちの優雅な遊びである宴から豊作祈願や収穫の喜びを分かち合い感謝する日として、お月見が定着していったようです。

十五夜の頃(新暦9月頃)は台風などで天気が良くないときも多く、十三夜の頃(新暦10月頃)は秋晴れで美しい月をみれることから、「十三夜に曇りなし」と言われています。

今年の「十三夜」は、10月15日です。秋の収穫に感謝しつつ平安時代の雅にちょっぴり思いを馳せて、十五夜よりも味わいがあるともいわれた「十三夜」を楽しんでみてはいかがでしょうか？

(館報編集委員 T)

10月「神無月」

旧暦の10月には、日本全国から無数の神々が出雲に集まるといわれています。神々は、一週間かけて、出雲大社の主祭神であるオオクニヌシノカミと一緒に、来年の収穫の成否や人々の関係を決めていきます。このため、この時期は国のほとんどで神のいない月(神無月)と呼ばれていますが、出雲では神のいる月(神在月)と呼ばれています。